

保育者養成校におけるアクティブ・ラーニング を用いたピアノレッスン及び幼児に対する 音楽表現指導法に関する一考察

佐藤 雄紀

(抄 録)

日本の幼児音楽教育の中でピアノは大きな位置を占めている。現在、保育者養成校に入学してくるピアノ初心者の割合は7割に及び、保育現場からの要求も年々変化しているが、依然として養成校の授業形態に大きな変化は見られない。本学では、様々な進度の学生が満足でき、卒業後も自分で学んでいける力をつけることを目標に、アクティブ・ラーニング型のピアノレッスン及び幼児を想定した音楽表現指導の導入を試みた。バスティン・ピアノメソードと弾き歌いの教材を用いて、初心者から上級者のどの進度の学生にも音楽指導をさせたり、積極的に発言させたり、お互いに助け合わせたりすることで、学生に大きな変化が見られた。現代の保育者養成校における理想的なピアノレッスン及び音楽表現指導法のあり方を、実践と調査を基に探った。

キーワード：保育者養成、ピアノ、アクティブ・ラーニング、レッスン形態、協同学習、
幼児、音楽表現、指導法、バスティン

I はじめに

1 現代の保育者養成校におけるピアノレッスン形態の課題

筆者はこれまで様々な保育者養成校でピアノを指導してきて、養成校のピアノレッスン形態にはまだまだ改善の余地があると長い間模索してきた。

- 1) 多くの保育者養成校のピアノの授業は、一人当たり10～15分の個人

レッスンの形態で行われている。だが、この形が保育者養成校の学生にとって最も望ましい形なのか、再考の必要性。

- 2) 一方、その個人レッスンの形態に対する形として誕生した、ML(Music Laboratory の略)の課題とは何か。そして、これからの保育者養成校の理想的なピアノレッスン形態を再考する必要性。

まず1) について、多くの保育者養成校が個人レッスンの授業形態で行われている背景には、養成校の教員が幼少期から音楽大学、教育大学で受けてきたピアノレッスンの形が大きく影響していると考えられる。多くの教員は音楽大学や教育大学も個人レッスンであるから、保育者養成校もどんなに短時間の10～15分であっても、同様に個人レッスンの形態が望ましいだろうと考えている。あるいは、通常ピアノのレッスンというのは一対一で行われるものなので、深く検討されてこなかったのかもしれない。だが、入学してくる学生の変化、現状を見る限り、保育者養成校の学生にとって最も望ましい授業形態かどうかは再考されなければならないだろう¹⁾。

(多くの保育者養成校は)2年という短期間の指導で、保育現場で通用するピアノの水準にまで学生を引き上げていかなければならず、以前にも増して養成校に課せられた使命は大きくなっている。今や7割に及ぶ初心者と²⁾、様々な進度の学生が混在するピアノの授業をどのように進めていけば、最大限に学生の力を伸ばしてあげられるのだろうか。各保育者養成校が、最も頭を悩ませているところである。個人レッスンの10～15分の時間を半期15回で計算すると、10分の場合は150分(2時間30分)、15分の場合は225分(3時間45分)である。仮に2年継続してピアノの授業を受講したとすると、10分の場合は600分(10時間)、15分の場合は900分(15時間)である。思っていたより、レッスン時間があるのではないかと感じられた先生もいらっしゃるかもしれない。だが、そう感じた先生は是非、自分が大学で受けてきたレッスンの時間を計算してみてほしい。今や保育者養成校の7割を占める初心者の学生に対し

て、2年間のピアノレッスン全ての時間でこの時間しかないのだ。筆者は、もっと教員と一緒にレッスンの時間を過ごし、練習の仕方、考え方、実践的な歌唱指導を学ばせてあげ、経験者・上級者の力も借りて、もっともっと有益なレッスンの時間にしてあげたいとずっと考えていた。

一方2) について、MLのシステムによるグループ・レッスンは、「指導者用楽器と生徒用楽器をML装置で接続して、集団学習の中での個別学習やグループ学習などを行うためのもの³⁾」である。衣・筒石ら(2005)が中国の教員養成大学に対して行ったMLについてのアンケート調査で、長所として高かったものは(50%以上の項目)は以下の二項目である⁴⁾。

- ・ 相互学習ができ、お互いの長所を生かせる。(67.46%)
- ・ いつも人前で演奏するので、演奏の時の過度な緊張や不安感を克服できるようになる。(55.62%)

対して、衣・筒石ら(2005)の行ったアンケート調査で、MLの短所として高かったものは(50%以上の項目)は以下の二項目である⁵⁾。

- ・ 指先のタッチの感覚が弱い。(72.78%)
- ・ 一つの授業に1人の教師が多数の学生を教えるので、細かな指導に限界がある。(64.50%)

また、グループ・レッスンまたは個人レッスンに対して意見、要望の項目には以下のような意見がある⁶⁾。

- ・ 「ピアノグループ・レッスンの授業時間が短く、細かな指導を受けられない。」(吉林芸術学院2年生)
- ・ 「個人レッスンを多めにするを提唱します。なぜなら、学生の實力を高められるからです。」(中央民族大学1年生)
- ・ 「私はピアノの初心者です。最初からグループ・レッスンでピアノを学んでいます。初心者にとってグループ・レッスンのほうがとてもい

いと思います。あまり緊張しないからです。ピアノを学ぶことには、緊張は大敵です。グループ・レッスンは楽な雰囲気がある。しかし、ある程度のピアノ実技能力を持ったら、個人レッスンを受ける必要があると思います。先生との一対一の指導により、学生の進歩はより明らかなのです。この視点から見ると、ピアノグループ・レッスンの短所は、やはり細かな指導に限界があることでしょう。」（広東外国語芸術職業学院1年生）

上記のように、学生達はMLでのピアノ指導について、緊張が和らぐなどのメリットを感じながらも、（心の奥底では）個人レッスンで丁寧にピアノを指導してもらいたいと望んでいる。また、MLの課題としてピアノと異なった軽いタッチのことも多く挙げられている。

個人レッスンで指導すると一人ひとりの時間は限られたものになってしまい、MLで指導すると一人ひとりに細かな指導が行き届かなくなってしまう。筆者はこれまで様々な養成校でピアノを指導してきて、このどちらか一方の方法では、保育者養成校の学生の力を最大限に伸ばすのには限界があると考え、長い間試行錯誤をしてきた。そうして辿り着いた取り組みが、今回のアクティブ・ラーニング⁷⁾型のピアノレッスンである。今までのピアノ指導の形態とどこが異なり、新しい取り組みなのか、そして、どうして学生により力をつけることができるのかを次章で述べていく。

II アクティブ・ラーニングを用いたレッスンの特徴

■ 使用教材

1) ジェームス・バスティン

『バスティン ピアノベーシックス ピアノ（ピアノのおけいこ）レベル1』

『バスティン ピアノベーシックス ピアノ（ピアノのおけいこ）レベル2』

『バスティン ピアノベーシックス ピアノ（ピアノのおけいこ）レベル3』

東音企画、2009年

- 2) 田中 常夫、平島 美保、木村 鈴代、小杉 裕子

『こどものうた(簡易伴奏曲付)』圭文社、2011年

- 3) 森本 琢郎、池田 恭子

『ジュニアクラスの楽典問題集』ドレミ楽譜出版社、2008年

アクティブ・ラーニングの重要性が叫ばれるようになって久しいが、筆者はこのアクティブ・ラーニングを用いたピアノレッスンこそ、現代の保育者養成校に於いて最も学修成果が期待できる授業形態であると考えている。学生の力を最大限に活用し、個人レッスン、MLの二つの指導法の良いところを組み合わせるのである。ただ、単に個人レッスンの時間、MLの時間と分けて組み合わせるのではなく、学生・教員が協力して、創造的に授業を組み立てることが非常に大切で、変化を敏感に感じ取り、要望を見極め、学生の上達のため、実践的な指導をできるようにするため、新たな考え方・練習方法を習得させるため、レッスンの内容を臨機応変に、伸縮自在に展開するのである。教員は学生にピアノを教えながらも、小グループ(6人程)の様子にも目を行き届け、教える側にも教えられる側にも助言を与える。学生同士も変化を聴き合い、教え合い、どのレベルの学生も歌唱指導を行う。これはペース・メソッド⁸⁾で見られるロバート・ペース博士のグループ・ピアノ指導⁹⁾の理念に共通する面が見られる。以下に、筆者の論文より本学の新しいカリキュラムの特徴を引用する。詳しくは、注2の佐藤(2017)を参照されたい。

■ カリキュラムの特徴

- 1) ピアノの進度に応じてレベルを細かく4つに分けた。
- 2) 4つのレベルに応じて、使用する教科書を分けた。
(レベル4は自由選択のため、バスティンの教科書は使わない)
- 3) 多くの曲の合格をもらいながら、学習を進められることにより、初心者に自己効力感を持ってもらえるバスティンを教材として選択した。

- 4) 1、2年のカリキュラムを学年で区切ることなく、上限なく横断して学べることにより、経験者、上級者にも挑戦させ続けることを意識した。
- 5) バスティンの歌詞がある曲は必ず弾き歌いさせることにして、童謡曲への移行をスムーズにできるようにした。
- 6) どのレベルの学生にも、弾き歌いの演奏をする時には、他の学生に周りで歌ってもらったり、子どもへの声かけを含む歌唱指導をさせたりし、ピアノを始めた早い段階から保育現場での指導を意識させた。
- 7) ピアノ経験者の学生には、授業中でも随時、初心者の学生を教え、助けるよう促した。
- 8) 楽典問題集を既定の所まで終わることを実技試験の受験条件にした。初心者はもちろんのこと、経験者にも基礎知識に抜けがある場合が多いので取り入れた。質問は随時受け入れた。
- 9) 各レベルの規定以上に曲を終えている学生、前向きに取り組んだ学生は、試験での結果に加えて加点し、初心者であっても優秀な成績を取れるようにした。また経験者で、初心者に教えたり、助けたりしている学生は高く評価した。逆に実力があっても上達や意欲が感じられない場合は、厳しく採点した。
- 10) 実習曲や、就職試験曲を柔軟に授業課題と振り替えられるよう留意した。

本研究では、特に上記のカリキュラムの特徴の6)、7)のレッスン形態に焦点を当てていく。また、音楽Ⅱのシラバス(図1)、音楽Ⅰ、Ⅱの受講にあたって(図2)、音楽Ⅲ、Ⅳの受講にあたって(図3)を紹介する。

図1 音楽Ⅱのシラバス

授業科目名	単位数	必選別	開講時期	授業形態	担当者
音楽Ⅱ	1	選択	1年後期	演習	佐藤 雄紀
<p>【ディプロマポリシーに基づき重点的に身につける能力】</p> <p>【保育の心】 自主的に学び続ける姿勢と、保育者として適切な使命感及び倫理観を持ち、子どもをはじめ支援を必要とする人々に共感的にかかわることができる。(△)</p> <p>【保育の理解】 保育の本質を理解し、子どもの成長や発達に関する確かな知識を修得している。(○)</p> <p>【保育の実践力】 保育に関する基本的な技能とそれを活用するための豊かな教養を有し、子ども一人ひとりに寄り添った保育を実践することができる。(◎)</p>					
<p>【授業内容】</p> <p>保育現場に必要な弾き歌い、歌唱、楽典を身に付けます。4つのレベルに応じた課題を通じて、楽譜の読み解き方、演奏姿勢、運指、効果的な練習方法を学びます。</p>					
<p>【授業方法】</p> <p>各教員のグループに分かれ、個人レッスンだけでなく、グループでレッスンをを行います。歌唱指導を実際に行ったり、互いに教え合ったりすること（アクティブ・ラーニング型授業）でクラス全体での上達を目指します。</p>					
<p>【到達目標】</p> <p>1、練習方法・練習習慣を身に付け、日々コツコツと取り組みレッスンに臨むことができる。</p> <p>2、友人に対して、子どもを想定して歌唱指導やピアノの指導ができる。</p> <p>3、ピアノや弾き歌いの各レベル課題曲を全曲合格し、試験に臨むことができる。</p>					
授業計画		準備学習（事後の学習、課題等は授業時に指示）			
1週	夏休み課題発表、グループ討論、意見交換	夏休みの課題を練習し、楽典 pp.49-50 を解いておく。			
2週	バスティン各レベル課題曲（1）グループレッスン	各レベルの課題曲を練習し、楽典 pp.51-52 を解いておく。			
3週	おべんとう（p.9）グループレッスン	おべんとうを練習し、楽典 pp.53-54 を解いておく。			
4週	バスティン各レベル課題曲（2）グループレッスン	各レベルの課題曲を練習し、楽典 pp.55-56 を解いておく。			
5週	おかえりのうた（p.7）グループレッスン	おかえりのうたを練習し、楽典 pp.57-58 を解いておく。			
6週	バスティン各レベル課題曲（3）グループレッスン	各レベルの課題曲を練習し、楽典 pp.59-61 を解いておく。			
7週	中間発表、グループ討論、意見交換	後期課題の半分を終えられるよう練習しておく。			
8週	バスティン各レベル課題曲（4）グループレッスン	各レベルの課題曲を練習し、楽典 pp.1-10 を再度解く。			
9週	メリーさんの羊（p.12、p.303）グループレッスン	メリーさんの羊を練習し、楽典 pp.11-17 を再度解く。			
10週	バスティン各レベル課題曲（5）グループレッスン	各レベルの課題曲を練習し、楽典 pp.18-25 を再度解く。			
11週	さよならのうた（p.224）グループレッスン	さよならのうたを練習し、楽典 pp.26-33 を再度解く。			
12週	バスティン各レベル課題曲（6）グループレッスン	各レベルの課題曲を練習し、楽典 pp.34-48 を再度解く。			
13週	バスティン各レベル課題曲（7）グループレッスン	各レベルの課題曲を練習し、楽典 pp.49-55 を再度解く。			
14週	バスティン各レベル課題曲（8）グループレッスン	各レベルの課題曲を練習し、楽典 pp.56-61 を再度解く。			
15週	まとめ	前期課題をしっかりと復習しておく。			
<p>【成績評価の方法・基準】 試験 60% 授業に対する取り組み 40% で評価。各レベルの規定以上に曲を終えている学生、前向きに取り組んだ学生、友人に対して教えたり、助けたりした学生は加点して評価する。各レベル所定ページまでの課題を終え、弾き歌い4曲を合格しないと試験を受けることが出来ません。</p>					
<p>【テキスト】 『こどものうた』（主文社）978-4874460764、『バスティンピアノベーシックス レベル1、レベル2、レベル3』978-4903291697、978-4903291604、978-4903291666、『ジュニアクラスの楽典問題集』978-4285121568</p>					
<p>【参考書等】 ブルグミュラー、ソナチネアルバム、ピアノ名曲集、ディズニー曲集、ジブリ曲集</p>					
<p>【学生へのメッセージ・履修上の留意点】 レッスンを受けるにあたって、友人同士の助け合い、教え合い、毎日の練習が欠かせません。少しでも上達できるよう一緒に頑張ってください。</p>					

図2 音楽Ⅰ、Ⅱの受講にあたって

音楽Ⅰ、音楽Ⅱの受講にあたって



音楽Ⅰ、Ⅱでは、より個人の進度に沿った適切な教材を使ってもらうために、4つのコースに分けました。

- ・レベル1[教科書：バスティンピアノベーシックス レベル1]
- ・レベル2[教科書：バスティンピアノベーシックス レベル2]
- ・レベル3[教科書：バスティンピアノベーシックス レベル3]
- ・レベル4[教科書：自由選択 ※担当教員と相談の上、指定します。]

- 1、最初の授業時に、どのコースにするか3人の教員と相談して決めます。
- 2、3人の教員のいずれかに配属され、基本的に半期(前期なら前期期間中、後期なら後期期間中)同じ教員からレッスンを受講します。
- 3、各レベル到達以上に課題曲が進んだり、弾き歌い曲など多く合格した場合は試験の点に加点します。

音楽Ⅰの共通事項

- ・中間試験までに楽典問題集(丸付けも自分で行う)をp.22まで終えないと中間試験は受験できません。
- ・最終試験までに楽典問題集(丸付けも自分で行う)をp.48まで終え、おはよう(p.4)を合格しないと、最終試験を受験できません。終わった人はどんどん先に進みましょう。

音楽Ⅱの共通事項

- ・中間試験までにおべんとう(p.9、p.258)、おかえりのうた(p.7、p.254)を合格しないと、中間試験を受験できません。
- ・最終試験までに楽典問題集(丸付けも自分で行う)をp.61まで終え、メリーさんの羊(p.12、p.303)、さよならのうた(p.224)を合格しないと、最終試験を受験できません。終わった人はどんどん先に進みましょう。

以下は自分の該当コースの注意をよく読んでレッスンに臨んでください。

☆バスティンピアノベーシックス レベル1コースの学生

音楽Ⅰ 中間試験までにp.24 最終試験までにp.40

音楽Ⅱ 最終試験までに一冊終える。最後はアラベスクを演奏する。

☆バスティンピアノベーシックス レベル2コースの学生

音楽Ⅰ 中間試験までにp.23 最終試験までにp.37

音楽Ⅱ 最終試験までに一冊終える。

☆バスティンピアノベーシックス レベル3コースの学生

音楽Ⅰ 中間試験までにp.25 最終試験までにp.37

音楽Ⅱ 中間試験までにピアノ曲1曲(教員と相談) おべんとう、おかえりのうた、メリーさんの羊、さよならのうたまで終える。最終試験までにピアノ曲1曲(教員と相談) 音楽Ⅲ、音楽Ⅳのカリキュラムに従い、弾き歌い曲をどんどん進めていく(弾き歌い曲4曲以上合格すること)

☆自由選択 レベル4コースの学生

音楽Ⅰ 中間試験までにピアノ曲1曲(教員と相談) おはよう、おべんとう、おかえりのうた、メリーさんの羊、さよならのうたまで終える。以下音楽Ⅲのカリキュラムの弾き歌いをどんどん進めていく。

最終試験までにピアノ曲1曲(教員と相談) 音楽Ⅲ、音楽Ⅳのカリキュラムに従い、弾き歌い曲をどんどん進めていく(弾き歌い曲4曲以上合格すること)

音楽Ⅱ 中間試験までにピアノ曲1曲(教員と相談) 音楽Ⅲ、音楽Ⅳのカリキュラムに従い、弾き歌い曲をどんどん進めていく(弾き歌い曲4曲以上合格すること)

最終試験までにピアノ曲1曲(教員と相談) 音楽Ⅲ、音楽Ⅳのカリキュラムに従い、弾き歌い曲をどんどん進めていく(弾き歌い曲4曲以上合格すること)



図3 音楽Ⅲ、Ⅳの受講にあたって

音楽Ⅲ、音楽Ⅳの受講にあたって



音楽Ⅲ、Ⅳでは、音楽Ⅰ、Ⅱで学んだことを基に、より実践的な内容を学んでいきます。

- 1、4人の教員のいずれかに配属され、基本的に半期(前期なら前期期間中、後期なら後期期間中)同じ教員からレッスンを受講します。
- 2、ピアノ曲や弾き歌い曲など、基準より多く合格した場合は試験の点に加点します。

音楽Ⅲの共通事項

- ・中間試験までにピアノ曲1曲、弾き歌い曲4曲を合格しないと中間試験は受験できません。終わった人はどんどん先に進みましょう。
- ・最終試験までにピアノ曲1曲、弾き歌い曲4曲を合格しないと、最終試験を受験できません。終わった人はどんどん先に進みましょう。
- ・実習曲や就職試験の曲は課題曲と振り替えることが出来ます。(あまりに易しいものは不可、担当教員と相談して決定して下さい)

音楽Ⅳの共通事項

- ・中間試験までにピアノ曲1曲、弾き歌い曲4曲を合格しないと中間試験は受験できません。終わった人はどんどん先に進みましょう。
- ・最終試験までにピアノ曲1曲、弾き歌い曲4曲を合格しないと、最終試験を受験できません。終わった人はどんどん先に進みましょう。
- ・実習曲や就職試験の曲は課題曲と振り替えることが出来ます。(あまりに易しいものは不可、担当教員と相談して決定して下さい)

弾き歌い曲 音楽Ⅲ、音楽Ⅳ進め方

ぶんぶんぶん (p. 11)
あめふりくまのこ (p. 52, p. 242)
かたつむり (p. 60)
七夕さま (p. 64, p. 280)
ハッピーサードトゥユー (p. 3, p. 296)
しゃぼん玉 (p. 88)
アイアイ (p. 74, p. 240)
バスごっこ (p. 50, p. 292)
ミッキーマウスマーチ (p. 76, 別紙配布)
お化けなんてないさ (p. 92, p. 266)
まつぼっくり (p. 113, p. 299)
どんぐりころころ (p. 114, p. 289)
きのこ (p. 118)
やきいもグーチーパー (p. 140, p. 304)
まっかな秋 (p. 158, p. 300)
ジングルベル (p. 178, p. 274)
お正月 (p. 188)

思い出のアルバム (p. 222)

いぬのおまわりさん (p. 210)

うたえバンバン (p. 16, p. 246)

ここまでの曲を全て終えた学生は、担当教員と相談し決めましょう。

※実習曲や就職試験の曲も積極的に見てもらって下さい。



■ アクティブ・ラーニングを用いたレッスンの特徴と授業での様子

- 1) ピアノを同時に2台またはそれ以上のピアノを使ったダイナミックな指導法

これは、エル・システマの創始者で知られるアントニオ・アブレウ博士が、恩師のドラリーサ・ヒメネス・デ・メディナ女史に指導された方法¹⁰⁾からヒントを得たものである。その指導方法に加え、時には1台のピアノに二人の学生を座らせ、一緒に片手ずつの練習、片手と歌の練習、それぞれの右手と左手のアンサンブル、二人とも両手でアンサンブルなど様々なヴァリエーションを与え、変化に富んだ楽しい練習を心掛けた。また一緒に弾く際のテンポの設定や、合図も学生に任せた。

- 2) ピアノレッスンにゲーム性を与え、楽しんで取り組ませる。

例えば、「全員がこの部分を3回連続弾けるまでやってみよう。苦勞している友人がいたら自分なりのコツを教えてあげて、皆でできるようにしよう。」などの声掛けをした。これにより楽しみながらも全体のレベルの底上げが期待でき、友人とコミュニケーションを取りながら、指導を体験させることもできた。

- 3) 初心者の基礎力底上げや練習方法の定着のために、なるべく長い時間教員の近くで一緒にレッスンをする。

このアクティブ・ラーニングを用いたピアノレッスンの発想の原点はここにある。週に10～15分のレッスンで基礎力を身に付け、卒業後に自分で学んでいく力をつけていくのには限界がある。なるべく長い時間、教員の目の行き届くところでレッスンをした。小グループで一緒に行うことで友人の取り組みや成長を知り、刺激を受け合う姿を多く見ることができた。「あの子があんなにうまくなっているから、私ももっと頑張る。」という声が多く学生から聞こえてきた。

4) 取えて異なる進度の学生を小グループに混在させる。

CiNiiに掲載されているピアノのグループ・レッスンに関する論文の多くは、同じ進度の学生を集めてレッスンを行っている。だが、学生の真の成長のためには、小グループ内に様々な進度の学生が混じっている方が、教え合えるだけでなく、学習の幅が広がる。

5) ピアノ経験者・上級者の積極的な活用。

経験者・上級者には、積極的に授業を引っ張ってもらった。教員がしっかりと(小グループの)教える側と教えられる側を大きな目で見守ってさえいれば、何もピアノを教えるのは教員だけでなく良いのである。また、経験者・上級者に歌唱指導を行わせることにより、初心者は歌唱指導の方法を学ぶだけでなく、新しい曲の予習、歌唱練習をすることもできる。また、経験者・上級者の初心者へのピアノ指導は、必ず自らの学習に生きてくる¹¹⁾。保育者にとって大切な相手の変化に気付く力を養うことができる。もうこの学生は(ある事柄について)しっかり教えられるということが確認できていて、ピアノが混んでいる場合などには、「ここまで(別室で)教えてきて。」と頼むこともあった。学生達が別室に帰ってきたら、成果を一緒に確認した。

6) 教員は学生にピアノを教えながらも、小グループ(6人程)の様子にも目
行き届けさせ、教える側にも教えられる側にも助言を与える。

教員には、広い視野、豊かな創造性、高い集中力が求められる。教員自身もしっかりレッスンを行いながら、学生のレッスンのプロセス、成果をしっかりと見守り、教える側にも教えられる側にも助言を与えることが大切である。

7) 指番号の決め方など自分で学んでいける力を養う。

筆者が教えてきた多くの養成校で学生は、指番号を教員に頼ってくること

が多かった。しかし、卒業後には自分で考え決めていかなければならない。小グループ指導の際にどのような理由で、その指番号にするのかをしっかりと理解させ、自分で振れるようにしてあげることが重要である。そしてその理解をより確かなものにするため、教員の代わりに新しい曲の指番号を指導させた。

8) 初心者であっても自らの学んだことを生かし、友人を指導させる¹²⁾

これは必ずや園での音楽指導に生きてくる。自分より苦勞している様々な人の気持ちがわかり、助け合いの精神を学ぶことができる。5) の項目でも書かせて頂いたが、教えることにより一層力をつけることができる。どの進度の学生も常に頭、心、身体の活発な働きを必要とされ、無駄な時間が一切なくなった。

9) どの進度学生にも歌唱指導をさせる。

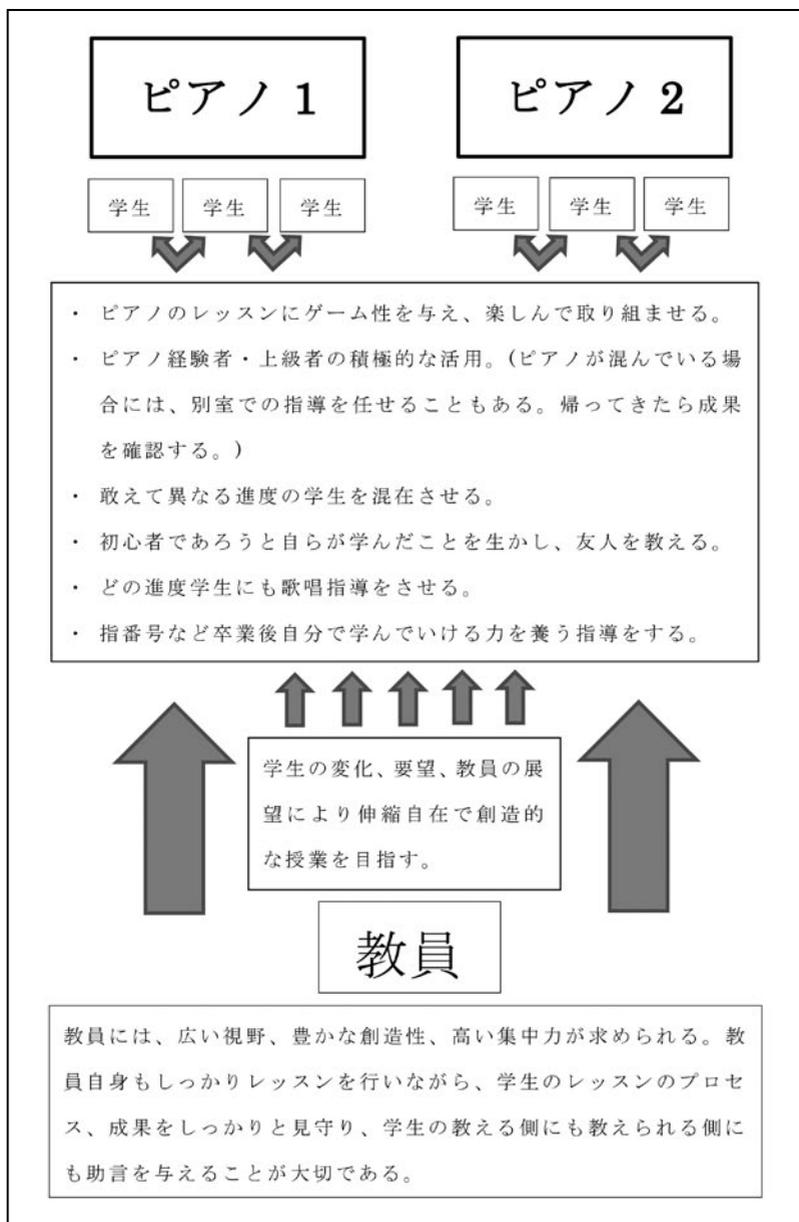
一般にピアノを始めたばかりの初心者に歌唱指導は無理だろうという定説を打ち破り、初心者から上級者のどの進度の学生にも歌唱指導を行わせた。バスティンの楽曲の多くには歌詞がついており、レベル1の段階から歌唱指導をすることが十分可能である。2年という限られた期間で、総合的な音楽的能力を引き上げるため、歌唱や歌唱指導の早期導入は欠かすことができない。学生に歌唱指導をしてもらった後には、良かったところや改善点を皆に向けて助言をすることで、どの進度の学生も次の歌唱指導に生かすことができる。

10) 学生の変化、要望、教員の展望により伸縮自在で創造的な授業を目指す。

このアクティブ・ラーニングを用いたピアノレッスンは、レベル別の決められたカリキュラムをしっかりと学ぶということを軸にすれば、指導法に唯一の正解などではなく、状況に応じて柔軟に変わり続けていかなければならない。

教員は学生の変化を敏感に感じる力と、成長させるための大きな展望を持っていれば、いくらでも伸縮自在に、臨機応変に、創造的な授業を展開して良い。この大規模な授業改革を真に成功させるためには、これまでの旧式の個人レッスンや、MLで指導をしてきた教員の意識改革が急務になってくるであろう。

図4 指導のイメージ



Ⅲ アンケート結果から見えてくるもの、考察

音楽Ⅱの授業を終え、学生にアンケート調査を行った。

対象：筆者が直接指導した、本学の音楽Ⅱの受講者 16 名

- | | | |
|-------------------------------------|----------|--------|
| 1) ピアノのレッスンの時間は充実して過ごせた | YES 94% | NO 6% |
| 2) 友人に教えたり、教えられたりした | YES 88% | NO 12% |
| 3) 教える時には自分の持っている知識を活用できた | YES 82% | NO 18% |
| 4) 歌唱指導など実践的なことを学べた | YES 88% | NO 12% |
| 5) 共に成長することができた | YES 100% | NO 0% |
| 6) 友人の成長に刺激を受けた | YES 94% | NO 6% |
| 7) 練習方法を学ぶことができた | YES 81% | NO 19% |
| 8) 問題について自分で考え、発言することができ | YES 82% | NO 18% |
| 9) 新たな考え方、方法を学ぶことができた | YES 75% | NO 25% |
| 10) 授業で得た経験、考えを他の曲に応用することが
できそうだ | YES 94% | NO 6% |

1) について、ピアノの授業を受講している初心者から上級者まで様々な進度の学生の感想として、94% もの学生がピアノのレッスンの時間は充実して過ごせたと回答しているのは意義深いことである。一人当たり 10～15 分の個人レッスンや ML のみの授業では、なかなか得ることができない回答結果ではないだろうか。このピアノレッスンでは、どの進度の学生も常に頭、心、身体の活発な働きを必要とされ、無駄な時間が一切なくなった。引き続き、充実したレッスンの時間になるよう、工夫していきたい。

2)、3) について、初心者の学生が 7 割を占める保育者養成校で、友人に教えたり、教えられたりしたの項目が 88%、教える時には自分の持っている知識を活用できたの項目が 82% というのは非常に意義深い結果である。経験者・上級者に初心者を積極的に教えてもらうことはもちろんのこと、本学では、初心者の学生も自分が得た知識・技能をより苦勞している学生に伝えるよう常に

指導してきた。その成果の一つであろう。引き続きこのような協同学習、助け合いの姿勢を大切に取り組んでいきたい。

4) について、歌唱指導など実践的なことを学べたの項目も 88% と非常に高い数字を示している。アクティブ・ラーニングを用いたレッスンの特徴の章でも書かせて頂いたが、一般にピアノを始めたばかりの初心者には歌唱指導は無理だろうという定説を打ち破り、初心者から上級者のどの進度の学生にも歌唱指導を行わせた。バスターンの楽曲の多くには歌詞がついており、レベル 1 の段階から歌唱指導をすることが十分可能である。2 年という限られた期間で、総合的な音楽的能力を引き上げるため、歌唱や歌唱指導の早期導入は欠かすことができない。筆者も現場の先生方が歌唱指導をどのように行っているか学び続け、学生がより実践的で、音楽的で、バラエティに富んだ歌唱指導を行えるよう、研究を続けていきたい。

5)、6) について、共に成長することができたの項目では何と 100%、友人の成長に刺激を受けたの項目では 94% と非常に高い数値が出ている。坂本(2013)も「協同学習を取り入れることは、授業への参加意識や他の学習者との仲間意識、達成感や成就感を持つことにつながり、自律的な学習が持続されることを確認した。¹³⁾」と協同学習の大きな成果を述べている。1) の項目のピアノのレッスンの時間は充実して過ごせたに加え、共に成長することができ、刺激を受けることができたというのはまさに、このアクティブ・ラーニング型のピアノレッスンは、個人レッスンと ML の良いところを両方兼ね備えていると言える。これからも学生の協同の学びを推進し、後ろからしっかり支え、見守り、指導していきたい。

7) について、練習方法を学ぶことができたの項目で 81% という高い数値が出ている。多くの養成校は 2 年という限られた時間の中で、学生の力をできる限り伸ばしてあげることはもちろんのこと、現場に出てからどのように学んでいけばよいかという独立の道を作ってあげることは非常に大切である。この結果は大変意義深い。

8)、9)、10)について、問題について自分で考え、発言することができたの項目では82%、新たな考え方、方法を学ぶことができたの項目では75%、授業で得た経験、考えを他の曲に応用することができそうなの項目では94%といういずれも高い数値が出ている。これらはアクティブ・ラーニングの学びの深まりを示す項目である。学生達がレッスンに対して受身の姿勢でなく、頭、心、身体の活発な働きを持って得ることができる結果で、どの項目も次の学びへ繋がるものである。これからもより深い学びを学生に提供できるよう取り組み続けていきたい。

IV 今後の課題、展望

まず今後の課題としては、まず保育者養成校の音楽教員の意識改革が急務に挙げられる。このアクティブ・ラーニングを用いたピアノレッスンは、養成校の教員が幼児期から大学、大学院まで受けてきたピアノのレッスンとはあまりに異なる授業形態であるため、非常勤講師の先生方が戸惑ってしまうことが予想される。非常勤講師の先生方の研修、念入りの準備と創造性によって実現されるこのアクティブ・ラーニング型のピアノレッスンの本格的実現に向け、邁進していきたい。

また本学では現在、入学前準備授業の更なる充実や幼児教育分野を目指す地域の中学生・高校生に向けてのピアノ無料講座が始動した。保育者養成校の音楽がもっともっと豊かな方向に進んでいくよう日々取り組んでいく所存である。

〈注〉

1) 佐藤 雄紀

「中学校・高等学校（音楽）の教員養成校におけるアクティブ・ラーニングを用いた相互ピアノレッスンに関する一考察」

『アクティブラーニングを導入した授業研究』、2017年

筆者は、保育者養成校と音楽大学や教育大学（特に中学校・高等学校の音楽教員養成）のピアノレッスンは事情が異なると考えている。音楽大学や教育大学は、保育者養成校に比べ、学生の演奏技術のレベルも高く、より専門性が増すため、基本的にピアノのレッスンは教員と一対一で行われる。各学生のピアノの技術や取り組む楽曲が大きく異なるため、こちらはこのような授業形態が最も望ましいと思われる。だが、保育者養成校の学生にとって、個人レッスンの形態が最も望ましいのかどうかは、再考されなければならないだろう。

2) 佐藤 雄紀

「保育者養成校における入学前準備授業とバスティン・ピアノメソードを用いたピアノのレベル別学習に関する一考察」

『信州豊南短期大学紀要』（34）、pp.119-160、2017年

本学でピアノの経験についてアンケート調査をしたところ、10年16%、5年14%、3年16%、初心者54%という結果になった。ピアノの経験年数3年は、かなり初心者に近いということを考えると、約7割はピアノ初心者ということになる。他の養成校でもピアノ初心者の増加傾向が見られ、この傾向は今後も続いていくと思われる。

西海 聡子、依田 洋子、今川 典子、高田 いちえ

「保育者養成校における器楽（ピアノ）教育（2）－初心者における弾き歌いの難しさとその改善の試み－」

『宝仙学園短期大学紀要』（33）、pp.37-50、2008年

伊藤 仁美、葛西 健治、多賀 洋子、今川 典子、嶋田 陽子

「保育者養成における音楽授業科目に関する一考察(1)－本学の初年次音楽教育カリキュラムの比較を通して－」

『こども教育宝仙大学紀要』(6)、pp.1-10、2015年

吉村 淳子、芝崎 美和

「保育者養成におけるピアノ指導について－学生の自己効力感に着目して－」『新見公立大学紀要』(36)、pp.59-66、2015年

西海ら(2008)によると、昭和62年度入学生では、初級者(経験なしとバイエル程度)は18%であったが、平成18年度入学生では、初級者が52%、伊藤ら(2015)が引き続き行った、平成26年度入学生の初級者は72.2%と著しく増加したと述べている。吉村(2015)の調査でも2014年度入学生ではピアノ未経験者は30%、初心者(バイエル少し)が30%となっており、60%の学生はほとんどピアノが弾けない状態で入学している現状であると報告している。

3) 柏瀬 愛子

「ピアノ演奏技術に及ぼすM.L.での集団レッスン効果」

『名古屋女子大学紀要 人文・社会編』(41)、pp.115-127、1995年

4) 衣 梨、筒石 賢昭

「中国の教員養成大学・課程におけるピアノグループ・レッスンの研究：その歴史と現状」『東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系』(57)、pp.33-46、2005年

長所のその他(自由記述)の項目では以下のような意見があった。

- ・ 「練習しなくてもいいです。他人の演奏を聞いているからです。」(吉林芸術学院2年生)
- ・ 「心理素質を育てられると思います。」(星海音楽学院3年生)
- ・ 「ピアノグループ・レッスンの授業法を学べます。これは将来教師になったら、自分がより良くピアノグループ・レッスンを教えるこ

とに役立てると思います。」(広東外国語芸術職業学院1年生)

- ・「最も目立つ長所は個人レッスンと比べて緊張しないことでしょう。授業は楽です。」(広東外国語芸術職業学院1年生)
- ・「コンピュータ音楽をやっているので、電子ピアノでのピアノグループ・レッスンを受けることは必要だと思います。」(広東外国語芸術職業学院1年生)

5) 同論文、pp.33-46

短所のその他(自由記述)の項目では以下のような意見があった。

- ・「先生は学生それぞれの心理に配慮することはとても難しいです。良い教師は少なく、個人レッスンをうまく教えられる先生でも必ず電子ピアノでグループ・レッスンをうまく教えることは言えないでしょう。」(星海音楽学院3年生)
- ・「個人の指導時間がないから、学習の効果は良くないです。」(広東外国語芸術職業学院1年生)
- ・「あまり学べることがないから、興味が上がらない。」(広東外国語芸術職業学院1年生)

6) 同論文、pp.33-46

他にも以下のような回答あった。

- ・「ピアノグループ・レッスンは一斉教授ですので、学生みんなは教えられることを一斉に全部理解し身に付けることができないから、授業における学生の自主練習時間をより多めにしてほしいです。」(東北師範大学2年生)
- ・「電子ピアノの指先のタッチを良くならないでしょうか？また、グループ・レッスン中に学生たちにより良く参加させてほしいです。」(吉林芸術学院1年生)
- ・「先生はもっとまじめにやってほしいです。」(吉林芸術学院2年生)
- ・「グループ・レッスンと個人レッスンの割合をバランス良くしてほ

しいです。」(吉林芸術学院2年生)

- ・「グループ・レッスンでも、個人レッスンでも、学生のピアノに対する興味を高めることが大事だと思います。曲に対する背景知識を良く理解させ、学生それぞれの個人に応じた教授方法が望ましいです。」(吉林芸術学院2年生)
- ・「個人レッスンはグループ・レッスンより良いので、グループ・レッスンの時にもっと個人指導をもらいたいです。」(吉林芸術学院2年生)
- ・「ピアノが嫌いですから、グループ・レッスンも個人レッスンも嫌いです。」(吉林芸術学院2年生)
- ・「ピアノグループ・レッスンはない方がいいです。」(吉林芸術学院2年生)
- ・「やはり個人レッスンの方が自分の要求に合っています。」(吉林芸術学院2年生)
- ・「学生の誰でもグループ・レッスンと個人レッスンとも体験すべきだと思います。」(吉林芸術学院2年生)
- ・「一部の初心者にはグループ・レッスンで明らかな進歩があったら、個人レッスンに変更した方がいいと思います。グループ・レッスンの時間が短いので、教授効率は良くないと思います。」(星海音楽学院3年生)
- ・「グループ・レッスンでも個人レッスンでも長所をもつので、私は両方とも好きです。」(星海音楽学院3年生)
- ・「個人レッスンを受けたいです。先生の教えることを十分に学べるのです。」(広東外国語芸術職業学院1年生)
- ・「グループ・レッスンと個人レッスン両方とも受けるなら一番いいと思います。」(広東外国語芸術職業学院1年生)
- ・「1年生の時はグループ・レッスンで学ぶのがまだいいですが、2

年生からは個人レッスンまたはより少人数のグループ・レッスンの形で学んだ方がいいと思います。自分のミスをすぐ発見し、直すことができる。」(広東外国語芸術職業学院1年生)

7) 中井 俊樹 編著

『アクティブラーニング』より p.5

「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的な能力、教養、知識、経験を含めた汎用的な能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」(中央教育審議会 2012、p.37)

玉川大学出版部、2015年

溝上 慎一

『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』より p.7

「一方的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。」

東信堂、2014年

8) ペース・メソッド研究会 ペース・メソッドの特徴

<http://www.pacemethod.jp/about/text.html> (2017年3月12日現在)

「ペース・メソッドが目指す音楽教育とは、演奏を把握する知的理解(頭)、表現する為の感性(心)、そして演奏技術である身体行動(指)がバランスよく調和された状態です。これらの3つは、人間の基本的な要素でもありますから音楽演奏の開発過程において自然と感性豊かな人間形成へ

と繋がっていきます。ペース・メソッドは、人間形成も含めた新しい音楽教育の方向を目指しています。」

9) ペース・メソッド研究会 グループ・ピアノ指導

<http://www.pacemethod.jp/about/text.html> (2017年3月12日現在)

「教える側からいって、グループ・レッスンは個人レッスンより能率がいいので、経営の合理化に適しているといえます。しかしペース・メソッドでのグループ・ピアノ指導は、一概にそれだけを目的としたものではなく、もっと教育理念の本質的な考え方を基盤にしています。すなわち生徒同士の音楽を通しての相互作用 (Interaction) を利用して、個性と個性のふれあいによる、よい意味での刺激を活発にしようというものです。これにより子供達は、より幅広い多様な経験や工夫をしています。したがって、ここでのグループは、全員がうまく交流し合える小人数制のプロジェクト方式で考えられています。グループの子供達は、さらに2人ずつに分けられ、曲目演奏のためのレッスンがおこなわれます。曲目の演奏指導を、なぜ個人レッスンでやらないでペアレッスン(2人組)でおこなうかといいますと、理由は2つあります。第一には、弾く側だけで聴く側が無視されてしまわないよう、1人が弾いているあいだ、それをもう一人の仲間が聴くためです。そして聴き終わったら、一緒に演奏の内容についての掘り下げをやります。これは先生のお手本を模倣するために受け身で聴くのと違い、自分と同じレベルの仲間が少しずつ演奏の内容を磨いていく過程に積極的に参加するために聴くのです。内容の理解と一緒に弾くことをやり、同時に聴くこともやるわけです。これは音楽の細部を聴き取れる耳を作ります。弾くことだけに忙しくなると、聴音はとれても音のニュアンスを聴き取れる洗練された耳は育たないということになります。2人組のレッスンをおこなうもう一つの理由は、大グループ(4~6人)でやったことを、曲目演奏のレッスンにつなげていくためです。ここで先生が一方的伝授をやってしまったら、ら

せん学習は肝心なところで途切れてしまいます。せっかくグループ・レッスンで育てた能力です。それを背景に弾く側と聴く側の両方から曲の仕上げを錬っていくことが考えられています。もちろん、生徒達の注意力を必要なところに誘導していかねばなりませんから、先生の役割はむしろ個人レッスンよりも重要になります。グループ・ピアノ指導＝大グループ(4～6人組)+ペアレッスン(2人組)」

10) トリシア・タンストール

『世界でいちばん貧しくて美しいオーケストラ エル・システムの奇跡』
より p.77

その中でアブレウ博士はこのように述べている。

「私たちが7台で同時に弾いているあいだ、先生は1人ずつにアドバイスしてくれました。」「私たちは互いの演奏を聴き合い、いつも人に聴かせることを意識していました。しかも、そのことを楽しいと感じながら。」

東洋経済新報社、2013年

11) 佐藤 雄紀

「中学校・高等学校(音楽)の教員養成校におけるアクティブ・ラーニングを用いた相互ピアノレッスンに関する一考察」

『アクティブラーニングを導入した授業研究』、2017年

この例は教員養成校であるが、筆者は学生全員にピアノレッスンの指導を経験させた。学生達はピアノの指導を経験することにより、様々なことを感じてくれた(以下は学生のアンケートから抜粋)。これらを読むと指導経験の学びは計り知れない程に大きいことが分かる。

- ・ 指導していると、臨機応変に対応しながら指導することが大切であると実感しました。また、1人1人やクラスに合った指導をするためにも策をいくつも作る、出すということが大切であると実感しました。今後に生かしていきます。
- ・ 皆の授業は色々な曲を練習していないと伝えることができないの

で、私も沢山の経験が必要だということが分かった。教師になる上で1回1回の授業時間を無駄にせず、緊張感を持ってやっていかなければならないと考えている。曲の背景も勉強するべきだと思った。

- ・ 教えるのは難しいと改めて感じました。指導の仕方を学びたいです。
- ・ できない原因なども自分が演奏する時も考えられるようにする。
- ・ 同じ1つのレッスンを見て聞いていても、それぞれで感じられることが違うのだということに気づきました。他の人が指摘していたことによって新しい学びや感じられることも多くあり、良い学習ができました。指導する時に楽譜ばかりでなく本人の弾き方などの様子を把握するという必要だと考えました。自分ができないことでも指導はしっかりすべきだと感じました。

12) トリシア・タンストール、前掲書、p.174

これはエル・システマの考え方と共通する。

「子どもたちが教え合う光景を、私たちはシステマの教室で何度も目にした。しかも、教える側がさりげなく気遣っている、先生たちも相互扶助の精神として、生徒どうしのやり取りを奨励している。誰にでも何かしら人に教えられることがあり、知識は共有されるべきだという考えが、システマでは草創期から脈々と受け継がれている。」

13) 坂本 暁美

「協同学習を取り入れたピアノ実技指導の学習効果」『四天王寺大学紀要』(56)、pp.153-164、2013年

他にも

- ・ 相互に聴き合いをする活動は、情意面を喚起する効果が高い。
- ・ 学習者相互に聴き合うことで意欲が高まり、自律的な学習が促進された。
- ・ 学習者相互に批評することで、演奏技能向上に役立つ情報が交換された。
- ・ 他の学習者の努力が見えることで学習意欲が持続された。

と報告している。

参考文献

- 梁島 章子、山崎 和子、鹿谷 奈智子、坂井 康子
「初等教員養成のピアノ指導についての研究」
『京都教育大学紀要・A, 人文・社会』(75)、pp.59-84、1989年
- 北村 恵子、平澤 節子
「幼児教育者養成における器楽教育について」
『上田女子短期大学紀要』(32)、pp.97-108、2009年
- 小倉 隆一郎
「ML 授業におけるレッスン・カリキュラムの見直しとその効果」
『文教大学教育学部紀要』(43)、pp.39-47、2009年
- 赤津 裕子
「ML システムを活用した初心者のピアノ指導における成果と課題」
『電子キーボード音楽研究』(10)、pp.13-23、2015年
- 石原 慎司
「普通科高等学校の授業におけるピアノ初心者指導の試み ― 授業実施の方法論と教育効果について ―」
『北海道滝上高等学校 研究紀要』(4)、pp.54-71、2009年
- 杉江 修治、関田 一彦、安永 悟、三宅 なほみ
『大学授業を活性化する方法』
玉川大学出版部、2004年
- 杉江 修治
「協同学習による授業改善(教育心理学と実践活動)」
『教育心理学年報』(43)、pp.156-165、2004年
- 教育課程研究会
『「アクティブ・ラーニング」を考える』東洋館出版社、2016年
- ポール・シュマツニー、マリア・ストッドマイヤー(監督)
ドキュメンタリー「エル・システマ」(DVD)、EuroArts、2011年

ジェームス・バスティン

『バスティン ピアノベーシックス ピアノ(ピアノのおけいこ)レベル1』

『バスティン ピアノベーシックス ピアノ(ピアノのおけいこ)レベル2』

『バスティン ピアノベーシックス ピアノ(ピアノのおけいこ)レベル3』

東音企画、2009年

田中 常夫、平島 美保、木村 鈴代、小杉 裕子

『こどものうた(簡易伴奏曲付)』圭文社、2011年

文部科学省 幼稚園教育要領 第2章 ねらい及び内容

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/nerai.htm

(2017年3月15日現在)

厚生労働省 保育所保育指針

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/hoiku04/pdf/hoiku04a.pdf>

(2017年3月15日現在)